

埼玉県熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書

上之古墳群・諏訪木遺跡

2013

埼玉県熊谷市遺跡調査会

熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書

かみのこふんぐん・すわのきいせき
上之古墳群・諏訪木遺跡

2013

埼玉県熊谷市遺跡調査会

序

平成 17 年 10 月 1 日、熊谷市、大里町、妻沼町の一市二町が、さらに平成 19 年 2 月 13 日、江南町と合併して、新『熊谷市』が誕生いたしました。

新『熊谷市』は、南北約 20 km、東西約 14 km にわたり、面積は 159.88 km²、人口は 20 万人を越えることとなり、県北最大の都市として生まれ変わりました。新市は、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の 2 大河川が最も近接する流域に位置し、平坦な地形に肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、新市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、熊谷市遺跡調査会において平成 24 年に発掘調査を行った諏訪木遺跡及び上之古墳群について報告するものであります。本遺跡からは湧水を水源とした、幅広い年代にわたる用水路が確認され、土地利用の一端が窺えました。調査地点周辺は区画整理事業に伴う発掘調査が行われており、これらの成果と併せて、本市の歴史的発展を考証する上でも非常に重要なものといえます。本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りました遠藤里美氏並びに地元関係者には厚くお礼申しあげます。

平成 25 年 3 月

熊谷市遺跡調査会
会長 野原 晃

例 言

- 1 埼玉県熊谷市熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内9-2街区2画地に所在する上之古墳群（埼玉県遺跡番号59-013）及び諏訪木遺跡（埼玉県遺跡番号59-016）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は共同住宅の建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市遺跡調査会が実施したものである。
- 3 本事業の組織は、第I章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は次のとおりである。
上之古墳群・諏訪木遺跡 平成24年7月23日から平成24年8月17日
- 5 発掘調査は熊谷市教育委員会 蔵持俊輔が担当した。報告書執筆・編集は、蔵持が行った。
- 6 発掘調査に係る写真撮影及び遺物の写真撮影は、蔵持が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜りました。
(敬称略、五十音順)
新井 端 内田勇樹 金子正之 菅谷浩之 株式会社渋沢 小熊勝己

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。
遺構の略記号は次のとおりである。

S K 土壌・土坑 S D 溝 P ピット

調査区全測図… 1 / 8 0 遺構平面図・断面図… 1 / 6 0

- 2 遺構挿図中のスクリーントーン等は次のとおりである。

 = 地山

- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土師器・須恵器・磁器・陶器… 1 / 4 石製品… 1 / 4、1 / 8

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・瓦質土器：白抜き 須恵器：黒塗り 陶器： 磁器：

実測図の中心線は実線で示している。

遺物挿図中の断面箇所以外のスクリーントーンは施釉範囲を示す。

 = 釉薬

- 6 遺物拓影図のうち、向かって左に外面、右に内面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。() が付されるものは推定値、現存値を表す。胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で、含有量の多い順に示した。

A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質
G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫

- 8 写真図版の遺構・遺物の縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局編集、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目次

序文	
例言	
凡例	
目次	
I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	1
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II 遺跡の立地と環境	3
III 遺跡の概要	
1 調査の方法	8
2 検出された遺構と遺物	9
IV 遺構と遺物	10
1 溝跡	10
2 その他の遺構	19
V 調査のまとめ	22
挿図目次	
第1図 埼玉県の地形	3
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 調査地点位置図1	6
第4図 調査地点位置図2	7
第5図 全測図	8
第6図 調査区壁面断面図	9
第7図 第1号溝跡	10
第8図 第1号溝跡出土遺物1	11
第9図 第1号溝跡出土遺物2	12
第10図 第2号溝跡・出土遺物	14
第11図 第3号溝跡	14
第12図 第3号溝跡出土遺物	15
第13図 第4号溝跡	16
第14図 第4号溝跡出土遺物	17
第15図 第5・6号溝跡	18
第16図 第5号溝跡出土遺物	18
第17図 第1号土坑	19
第18図 第1号土坑出土遺物	19
第19図 第1～4、6～9、11～32号ピット	20
第20図 第21号ピット出土遺物	20

挿表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	5
-------------	---

第2表 第1号溝跡出土遺物観察表	13
第3表 第2号溝跡出土遺物観察表	14
第4表 第3号溝跡出土遺物観察表	15
第5表 第4号溝跡出土遺物観察表	16
第6表 第5号溝跡出土遺物観察表	18
第7表 第1号土坑出土遺物観察表	19
第8表 第21号ピット出土遺物観察表	20
第9表 ピット計測表	21

図版目次

図版1 全景 第1号溝跡	
第1号溝跡遺物出土状況1、2、3	
図版2 第2号溝跡 第3号溝跡	
第3号溝跡遺物出土状況1、2	
第4号溝跡 第4号溝跡遺物出土状況	
第5号溝跡 第6号溝跡	
図版3 第1号土坑 西側ピット群	
第18・19・20号ピット 第14号ピット	
出土遺物 第8図1～7	
図版4 第8図8～13 第9図14～17	
図版5 第10図1 第12図1～8	
図版6 第14図1～7 第16図1	
第18図1・2 第20図1	

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成24年4月9日付けで遠藤里美氏より共同住宅の建設に係る埋蔵文化財発掘の届出が提出され、埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて協議があった。予定地は上之古墳群及び諏訪木遺跡に該当する。予定地の所在する上之土地区画整理事業地内では、縄文時代後期から近世までの遺構・遺物が確認されており、工事に先立って発掘調査を実施する必要があると回答した。熊谷市教育委員会では4月26日に所在確認調査を実施したところ、複数の溝跡・土坑等の遺構が検出された。建設内容が遺跡の破壊が不可避であったため、保存策について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置が適当であるとの結論に至った。この結果を踏まえて、平成24年5月15日付け熊教社発第1096号にて発掘調査の措置が適当である旨申し、埼玉県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘の届出を送付した。その後、遠藤里美氏あてに埼玉県教育委員会教育長から、平成24年5月30日付け教生文第4-141号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査の指示がなされた。

事業主と具体的な協議を重ねたところ、早急に建設を開始したい意向があったが、調査実施には9月定例議会での9月補正予算の承認が必要であり、待機期間が発生する状況であった。そのため、熊谷市教育委員会では、工事の進捗に配慮し早急に発掘調査を実施する必要性が生じた。そこで、平成24年7月10日付けで埋蔵文化財に関する協定を事業主と締結したうえで、平成24年7月17日に熊谷市遺跡調査会を設立し、発掘調査を平成24年7月23日から実施した。

熊谷市遺跡調査会会長は、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく発掘調査の届出を平成24年7月18日付け熊遺発第2号で提出し、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、平成24年7月30日付け教生文第2-31号で発掘調査について通知があった。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成24年7月23日から平成24年8月17日にかけて行われた。調査面積は、共同住宅の建設によって破壊を受ける92.00㎡である。

調査の手順は、重機により遺構確認面まで表土を除去し、その後人力による遺構確認作業を行った。検出した遺構を順次精査し、遺構平面図・断面図を作成し、随時個別の写真撮影を行った。8月17日には調査区全景の写真撮影を行い、器材等を撤収して現場における作業を終了した。

(2) 整理・報告書作成作業

整理作業は平成24年11月1日から平成25年3月31日にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄・注記・接合・復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと平行して遺構の図面整理を行った。

次に、遺構・遺物のトレース・拓本を採り図版を作成した。そして、遺物の写真撮影、遺構・遺物写真の図版組みを行い、12月に原稿執筆・割付を実施した。翌年1月に報告書の印刷に入り、校正を経て3月31日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

平成24年度 発掘調査

主 体 者	熊谷市遺跡調査会	
会 長	野原 晃	(熊谷市教育委員会教育長)
副 会 長	鯨井 勝	(熊谷市教育委員会教育次長)
理 事	菅谷 浩之	(熊谷市文化財保護審議会会長)
	小野 美代子	(熊谷市文化財保護審議会委員)
監 事	正田 知久	(熊谷市教育委員会教育総務課長)
事務局 長	岩上 精純	(熊谷市教育委員会社会教育課長)
事務局次長	根岸 敏彦	(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事)
統括調査員	森田 安彦	(熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長)
調 査 員	蔵持 俊輔	(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任)
発掘担当者	蔵持 俊輔	

平成24年度 整理調査

主 体 者	熊谷市遺跡調査会	
会 長	野原 晃	(熊谷市教育委員会教育長)
副 会 長	鯨井 勝	(熊谷市教育委員会教育次長)
理 事	菅谷 浩之	(熊谷市文化財保護審議会会長)
	小野 美代子	(熊谷市文化財保護審議会委員)
監 事	正田 知久	(熊谷市教育委員会教育総務課長)
事務局 長	岩上 精純	(熊谷市教育委員会社会教育課長)
事務局次長	根岸 敏彦	(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事)
統括調査員	森田 安彦	(熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長)
調 査 員	蔵持 俊輔	(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任)
報告書編集・執筆者	蔵持 俊輔	

II 遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する。市の南側には荒川、北側には利根川がそれぞれ西から南東方向に向かって流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛挽台地、北・東側に妻沼低地、南側は江南台地が広がる（第1図）。

櫛挽台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mで妻沼低地に向かって緩やかに下っていく。

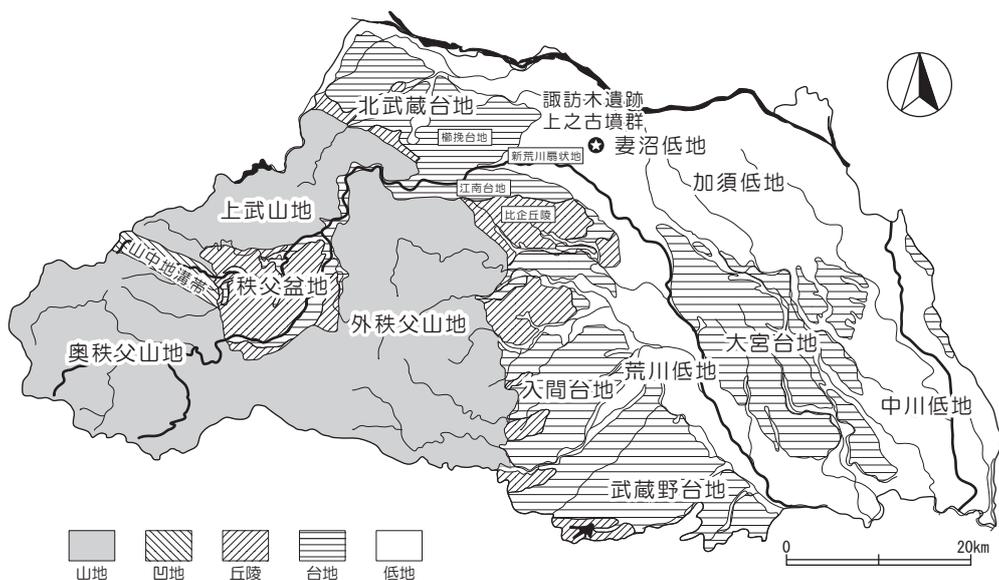
櫛挽台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した櫛挽台地南東端には丘陵地である観音山（標高81m、第3紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25m、沖積地からの比高差は約35mである。

今回報告する上之古墳群・諏訪木遺跡は新荒川扇状地扇端部の自然堤防上に立地し、標高は24m前後である。諏訪木遺跡北西部に上之古墳群は包含されている。諏訪木遺跡は縄文時代後期から近世までの複合遺跡であり、上之土地区画整理事業によって発掘調査が進行し、各時代で成果が挙がり、その概要が明らかになりつつある。上之古墳群は、古墳時代後期以降の群集墳と考えられる円墳2基が確認され、うち1基は墳丘が現存している。また、削平され埋没した古墳が周囲に存在している可能性がある。

次に本遺跡周辺の歴史的環境を概観する。

本遺跡周辺では縄文時代後期より遺跡が確認される。諏訪木遺跡北部及び箱田氏館跡からは、加曾利B式期以降の遺物がみられ、集落の所在が確認された。山形系統やミミズク等の土偶が出土し、晩期まで継続する様相がみられる。それ以前の時代の遺跡は、台地上や台地縁辺の低地に所在が集中している。

本遺跡周辺は縄文時代晩期以降、痕跡が途絶えるが、弥生時代前期末から中期前半頃は藤之宮遺跡に



第1図 埼玉県の地形図（上之古墳群・諏訪木遺跡位置図）



第2図 周辺遺跡分布図

て若干の遺物が採取されている。確認された遺構としては、再葬墓が顕著であり、横間栗遺跡、飯塚遺跡、飯塚北遺跡等が挙げられるが、台地縁辺部周辺地に所在が限られている。中期中頃になると新荒川扇状地・低地への進出がみられるようになる。池上遺跡からは東日本でも最古段階の環濠集落が検出され、その墓域とみられる小敷田遺跡からは最古段階の方形周溝墓がみられ、進出の本格化が窺える。中期後半になると、前中西遺跡、北島遺跡、そして本遺跡で集落が営まれ、墓域が形成されている。前中西遺跡を中心としたエリアは当該期から後期初頭にかけて東日本でも屈指の遺構が集中する地点といえる。北島遺跡では、大規模な集落が営まれるとともに、墓域が形成されている。また、水田跡とその水路や堰の存在が確認され、本格的な水田経営が行われていたことが判明している。後期初頭以降は藤之宮遺跡で土器片が若干採取される程度で、遺構は確認されていない。

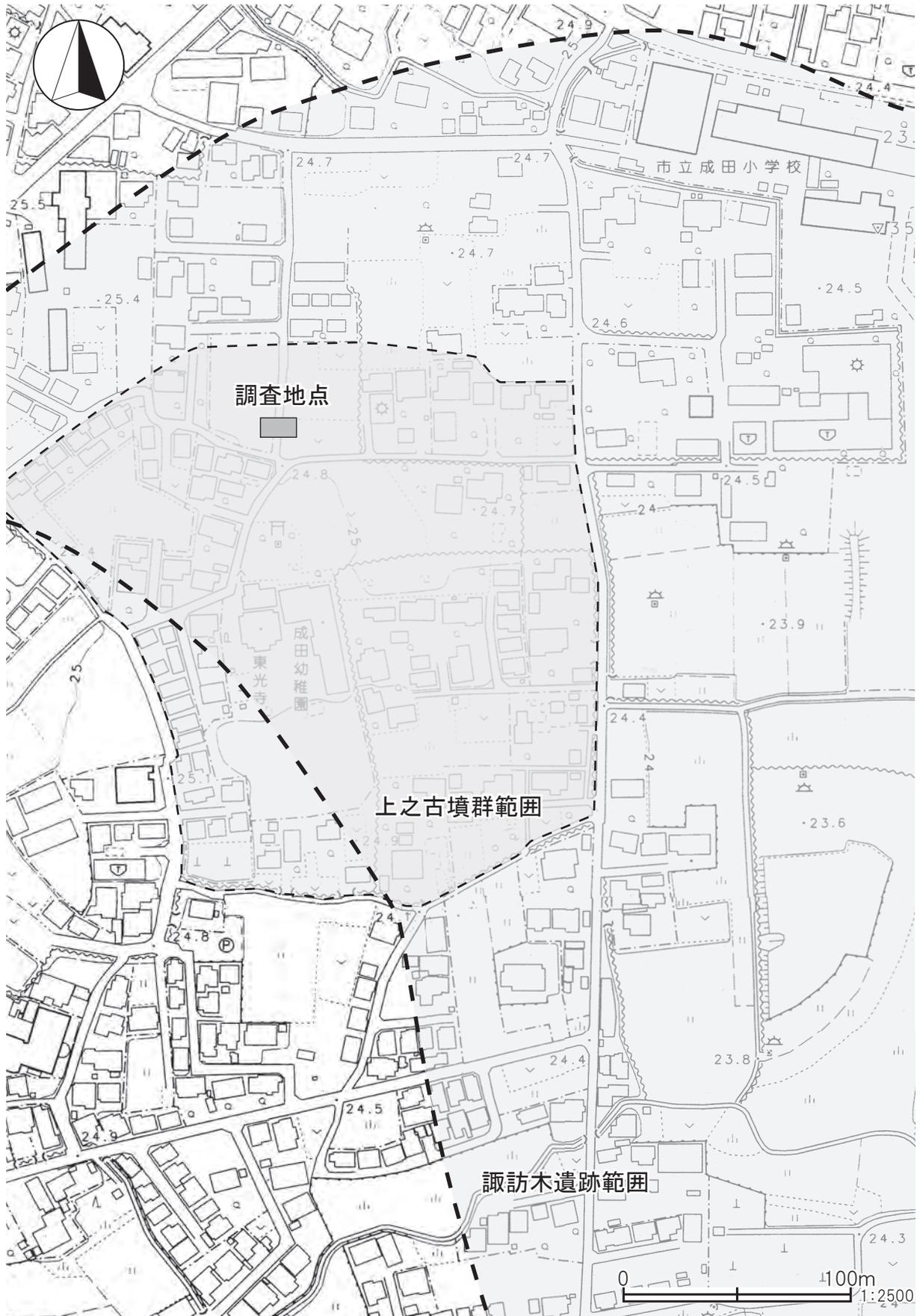
古墳時代前期では、前代に引き続き諏訪木遺跡、前中西遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡で集落跡が確認されたほか、諏訪木遺跡、北島遺跡、箱田氏館跡では墓域を検出している。箱田氏館跡では、前方後方形周溝墓が検出された。当該期は低地への進出が活発化してきた様相が窺える。中期になると痕跡が希薄になるが、前中西遺跡、藤之宮遺跡、中条遺跡で集落が営まれている。また中条古墳群内の鎧塚古墳、女塚1号墳や奈良古墳群内の横塚山古墳など古墳の築造もみられる。後期に入ると、遺跡数は爆発的な増加がみられ、奈良・平安時代まで継続するものが多い。また、古墳群も群集墳形態のものが各地で築造され、上之古墳群もこの時期に該当する。

律令体制の始まる奈良・平安時代には、本遺跡周辺は武蔵国大里郡に属していたと想定される。遺跡は古墳時代後期より継続するものが多く、規模も大きくなる。通常の集落と様相を異にするものがあり、諏訪木遺跡の東部では旧河川で水辺の祭祀の痕跡や、四面庇の大型掘立柱建物跡、軸方向の合う掘立柱建物跡群を検出している。池上遺跡では9世紀代の整列した大型掘立柱建物跡が確認されている。最たるものは、北島遺跡で台形状区画や配列された建物跡がみられ、施釉陶器を数多く検出している。集落のほか、生産地として中条条里遺跡等今も地割の痕跡がみられるものがある。

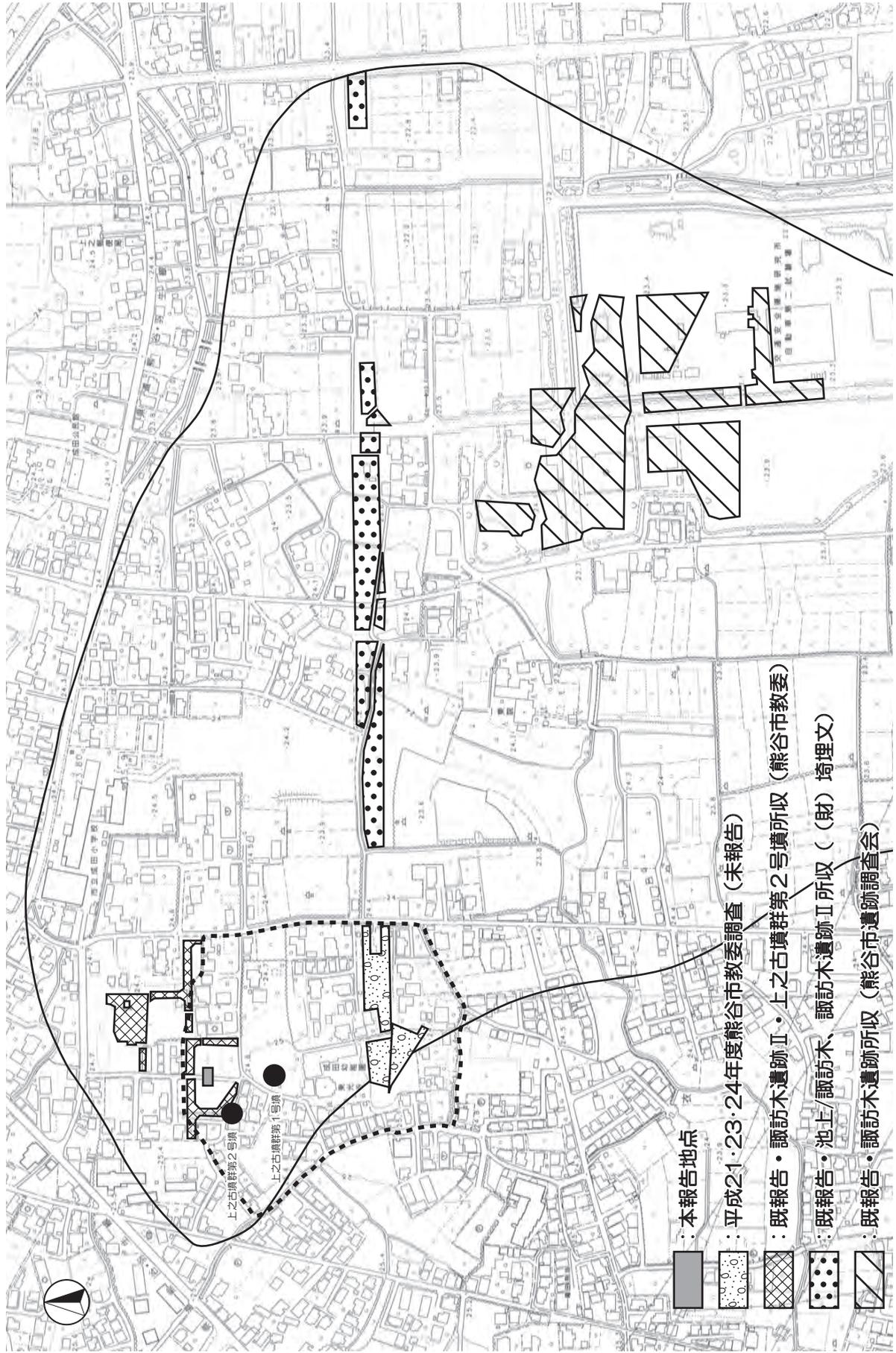
平安時代末から中世にかけて、武士が台頭する時期であり、多くの館跡がみられる。成田氏館跡は成田助高から親泰までの館跡とされる。当該期は依然として資料が不足し不明な点が多いのが実状である。

第1表 周辺遺跡一覧表

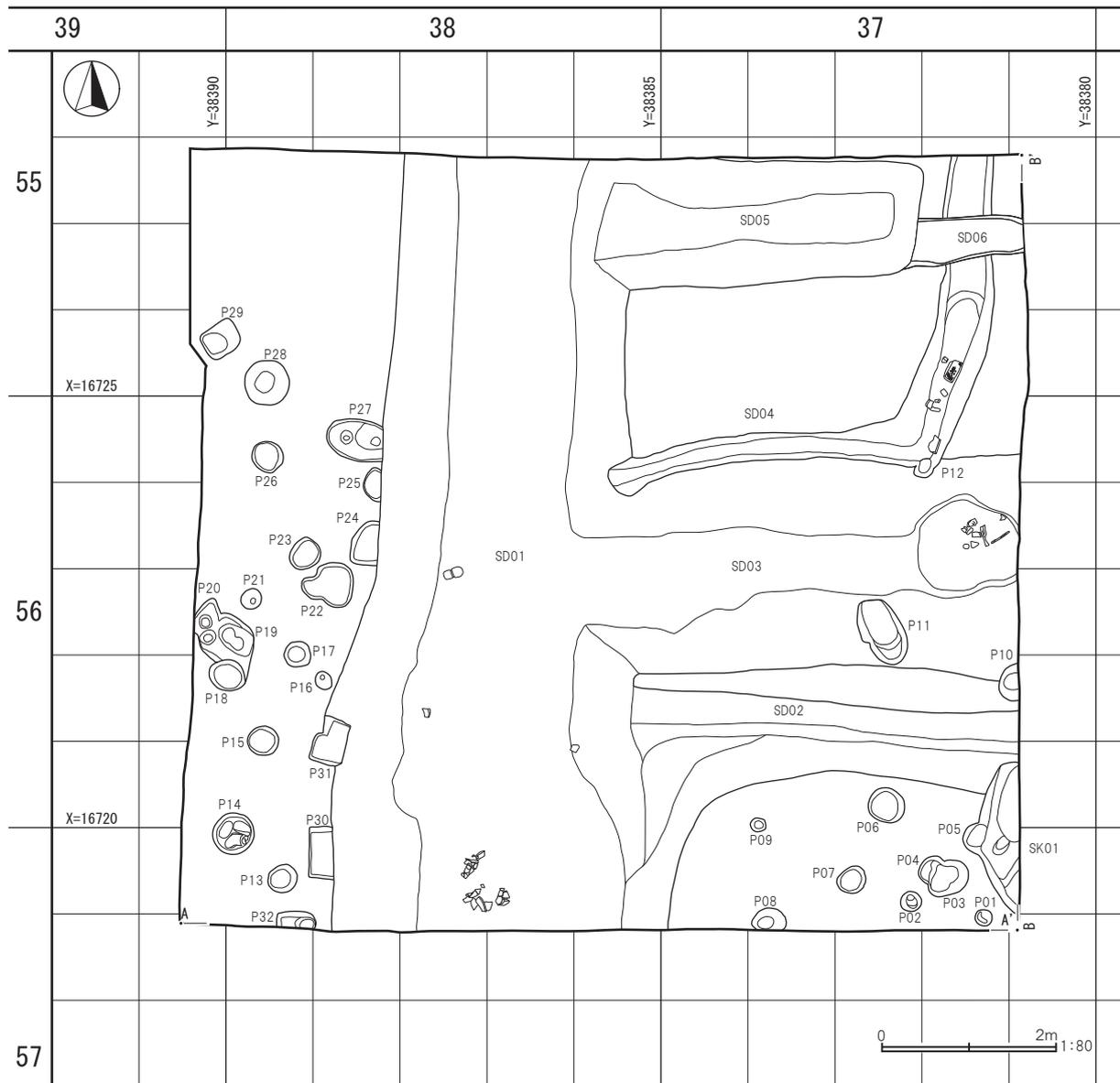
No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	諏訪木遺跡	縄文後・晩弥生中・後古墳 奈良・平安中・近世	15	河上氏館跡	中世
2	藤之宮遺跡	弥生中 古墳 奈良・平安 中世	16	八幡山遺跡	古墳
3	前中西遺跡	弥生中・後古墳 奈良・平安中・近世	17	出口下遺跡	古墳後
4	箱田氏館跡	縄文後・晩弥生 古墳 平安末～中世	18	熊谷氏館跡	中世
5	平戸遺跡	弥生中 古墳後 平安中・近世	19	宮町遺跡	奈良・平安 中世
6	久下氏館跡	中世	20	肥塚館跡	中世
7	市田氏館跡	中世	21	出口上遺跡	奈良・平安中・近世
8	成田氏館跡	中世	22	肥塚中島遺跡	奈良・平安 近世
9	池上遺跡	弥生中 古墳 平安	23	北島遺跡	弥生中・後古墳 奈良・平安 中世
10	古宮遺跡	縄文 弥生中 古墳前 奈良・平安中・近世	24	小敷田遺跡	弥生中 古墳前・後 奈良・平安
11	上河原遺跡	奈良・平安中・近世	古墳群		
12	宮の裏遺跡	古墳後	A	上之古墳群	古墳後～末
13	成田遺跡	古墳後	B	肥塚古墳群	古墳後～末
14	中条条里遺跡	古墳前・中 奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後



第3図 調査地点位置図1



第4図 調査地点位置図2



第5図 全測図

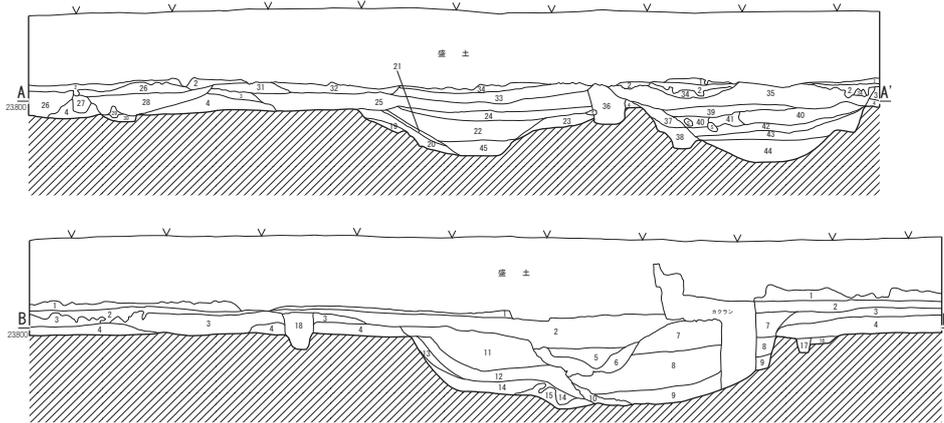
Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の方法

今回報告するのは、第3図で示した地点で、共同住宅建築箇所 90 m²についてである。

発掘調査は、重機により遺構確認面まで表土剥ぎを行った後、下記グリッドの設定を行った。なお座標は、周辺地における調査事例と整合を容易にする為、日本測地系を用いた基準点測量による。グリッド設定後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後、慎重に取り上げを行った。遺構についても必要に応じて写真撮影した後、実測を行った。そして最後に遺構全体の写真撮影を行い調査を終了した。

本報告で示すグリッドについて、過去刊行された『前中西遺跡Ⅱ』（熊谷市教育委員会 2002）及び『前中西遺跡Ⅲ』（熊谷市教育委員会 2003）において、上之土地区画整理地内全体を一辺 5 m とするグリッ



土層説明 (A-A', B-B')

1. 2.5Y5/1 黄灰色土 局所的に青灰色に粘土化 軽石含む (白色粒子) ※旧田土
2. 2.5Y5/1 黄灰色土 上層境に酸化鉄が層状に広がる 軽石含む (白色粒子)
3. 10YR4/1 褐灰色土 酸化鉄含む マンガン含む
4. 5Y6/1 灰色土 酸化鉄含む マンガン含む
5. 2.5Y4/1 黄灰色土 酸化鉄含む 軽石を含む 砂を含む
6. 砂層
7. 7.5Y4/1 灰色粘質土 酸化鉄含む 軽石少量含む
8. 2.5Y4/1 黄灰色土 酸化鉄含む
9. N2/ 暗灰色粘質土 酸化鉄含む 炭化物を含む
10. 砂層 酸化鉄を含む
11. 10YR4/1 褐灰色土 酸化鉄含む 軽石微量含む
12. 5Y4/1 灰色土 酸化鉄含む 炭化物微量含む
13. 5Y4/1 灰色土 酸化鉄含む 炭化物微量含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック5cm大多く含む
14. 7.5Y4/1 灰色土 酸化鉄含む 炭化物微量含む
15. 砂層
16. 2.5Y4/2 暗灰黄色土 酸化鉄含む
17. 2.5Y3/2 黒褐色土 酸化鉄含む
18. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック2~5cm大含む
19. 5Y5/1 灰色砂質土 酸化鉄含む
20. 5Y4/1 灰色土 酸化鉄含む 礫1~15cm大含む
21. 5Y4/1 灰色土 酸化鉄含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック1~10cm大含む
22. 5Y5/1 灰色砂質土 酸化鉄含む

23. 5Y4/1 灰色土 酸化鉄含む 礫1~15cm大含む
24. 2.5Y4/1 黄灰色土 酸化鉄含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック1~10cm大含む
25. 2.5Y4/1 黄灰色土 酸化鉄含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック5mm大含む 炭化物微量含む
26. 2.5Y3/2 黒褐色土 酸化鉄含む
27. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 炭化物微量含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック5mm大含む
28. 10YR4/1 褐灰色土 酸化鉄含む 礫5cm大含む
29. 2.5Y7/2 灰黄色土 酸化鉄含む
30. 2.5Y4/1 黄灰色土 酸化鉄含む
31. 5Y5/1 灰色土 酸化鉄含む 軽石少量含む 2.5Y6/2灰黄色ブロック10cm大含む
32. 2.5Y4/1 黄灰色土 酸化鉄含む 軽石少量含む
33. 5Y5/1 灰色土 酸化鉄含む 軽石少量含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック1~10cm大含む
34. 2.5Y6/2 灰黄色土 酸化鉄含む マンガン含む
35. 7.5Y4/1 灰色土 酸化鉄含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック1~5cm大多く含む
36. 2.5Y4/1 黄灰色土 酸化鉄含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック5cm大含む
37. 10YR4/1 褐灰色土 酸化鉄含む
38. 10YR2/1 黒褐色土 酸化鉄含む 炭化物微量含む
39. 5Y4/1 灰色土 酸化鉄含む 礫10cm大含む
40. 2.5Y4/2 暗灰黄色土 酸化鉄含む 礫5cm大含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック5mm大含む
41. 2.5Y6/1 黄灰色土ブロック
42. 5Y4/1 灰色土 酸化鉄含む
43. 2.5Y4/1 黄灰色土 酸化鉄含む 2.5Y7/2灰黄色ブロック1cm大含む
44. 10YR3/1 黒褐色土 酸化鉄含む
45. 砂礫層 礫10~20cm大含む

第6図 調査区壁面断面図

ドが設定されており、これと同じ設定を用いた。今回報告する調査地点のグリッドは、東西が39~37、南北が55~57である。

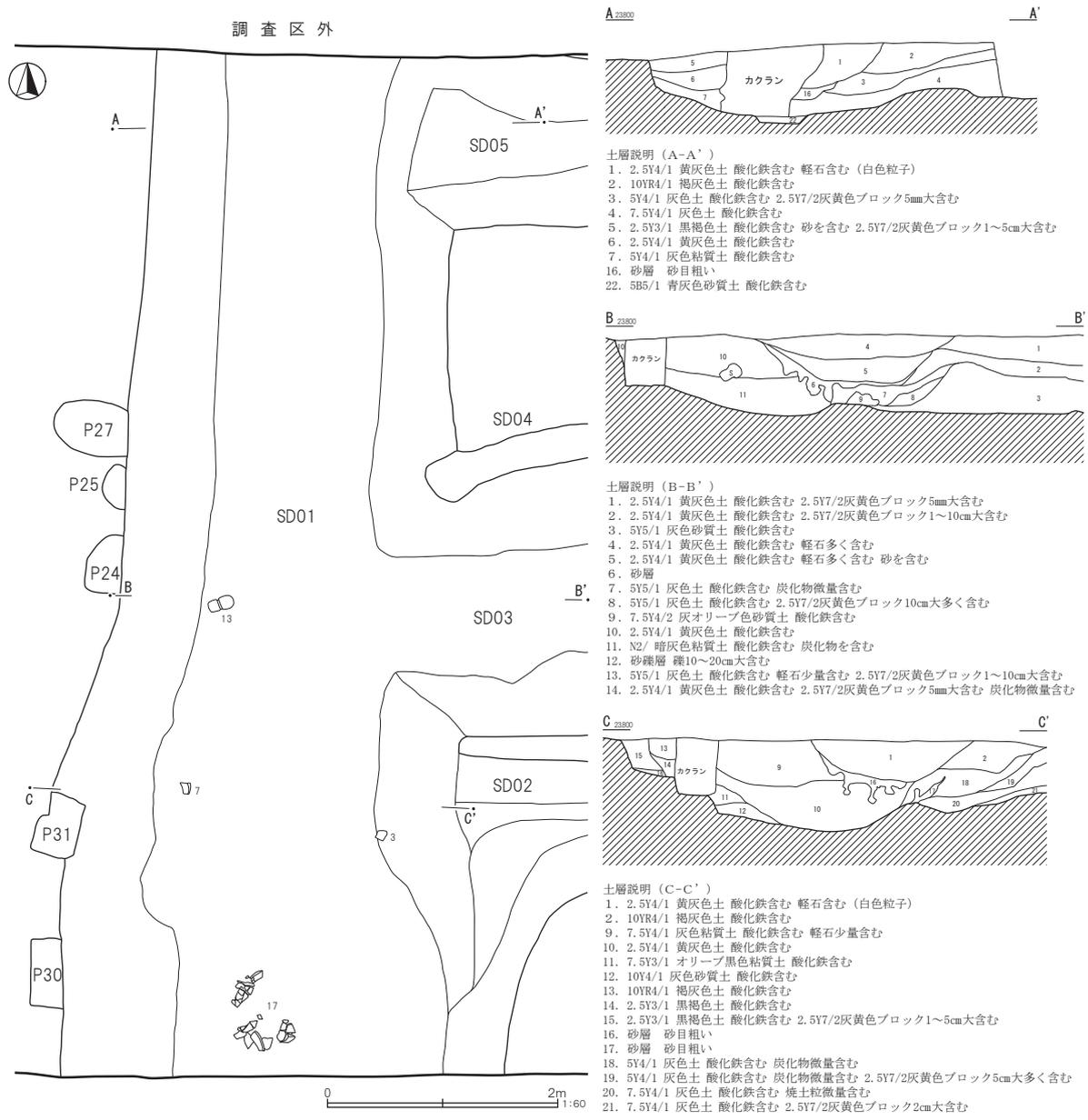
2 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構と遺物は、遺構が、溝跡6条、土坑1基、ピット32基であり、出土遺物は、土師器、須恵器、かわらけ、瓦質土器、中・近世陶器、青磁、石製品である。土師器、須恵器は奈良・平安時代のものであり、かわらけ、青磁、中世陶器、石製品(板碑)は中世に帰属し、近世陶器、石製品(五輪塔)は近世の所産と考えられる。

溝跡は、中央から東側にかけて検出された。中世のものと思われる第4号溝跡を除くと、近世に帰属するとみられる用水路と考えられる。南北方向に流路をとる大溝(第1号溝跡)と、直行関係にある東西方向の溝が連結しており、本流・支流関係あったものと推察される。時間を経て、埋没・浚渫・再生を繰り返しつつ、徐々に規模が小さくなり、その機能を喪失し、完全埋没に至ったと考えられる。水源は、調査区南方を東流する衣川と推察されるが、扇状地末端に特徴的な湧水が豊かなエリアでもあり、湧水が水量の一翼を担っていた可能性もある。

土坑は、調査区東側に1基確認されたが、検出範囲はわずかで、全体像は不明である。ただし、比較的大きく、深くなる傾向が窺えるため、井戸跡である可能性を示唆しておく。また、井戸跡の覆土によくみられる、20cm~5cm大からの礫が混入し、人為的に埋めた可能性がある。

ピットは西側に集中的にみられたが、薄いながらも全面的に検出している。調査区の大半が、溝跡の



第7図 第1号溝跡

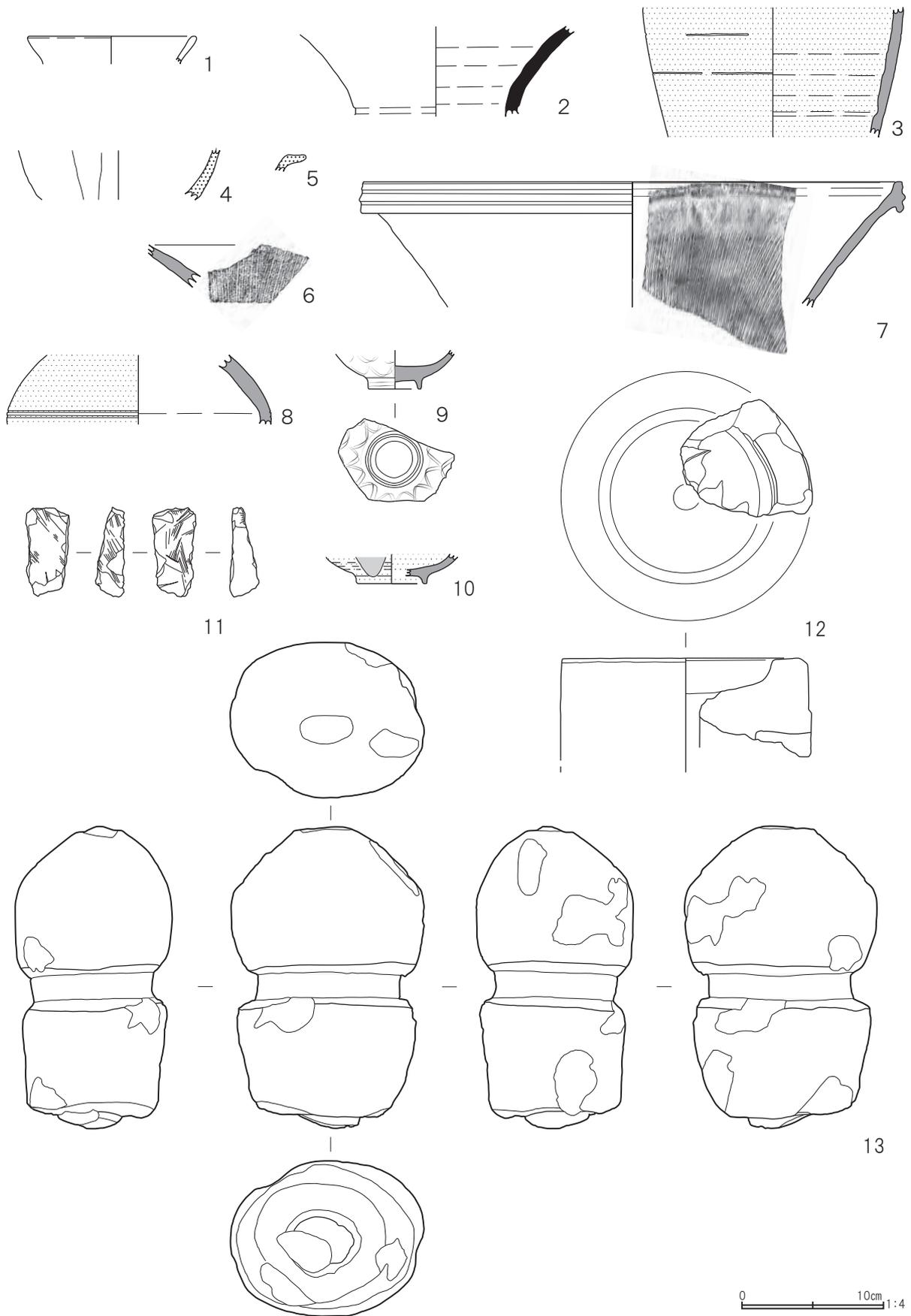
覆土であった為、切り合いや新旧関係の確認が困難であり、調査できた範囲での配列からは規則性を捉えることが難しく、総合的な機能が判然としない。覆土から判断するならば、中・近世に帰属すべき遺構と考えられる。西側にピットが集中する傾向と溝跡が存在しない検出状況からは、調査区西側方面に集落が展開していたものと推察される。

IV 遺構と遺物

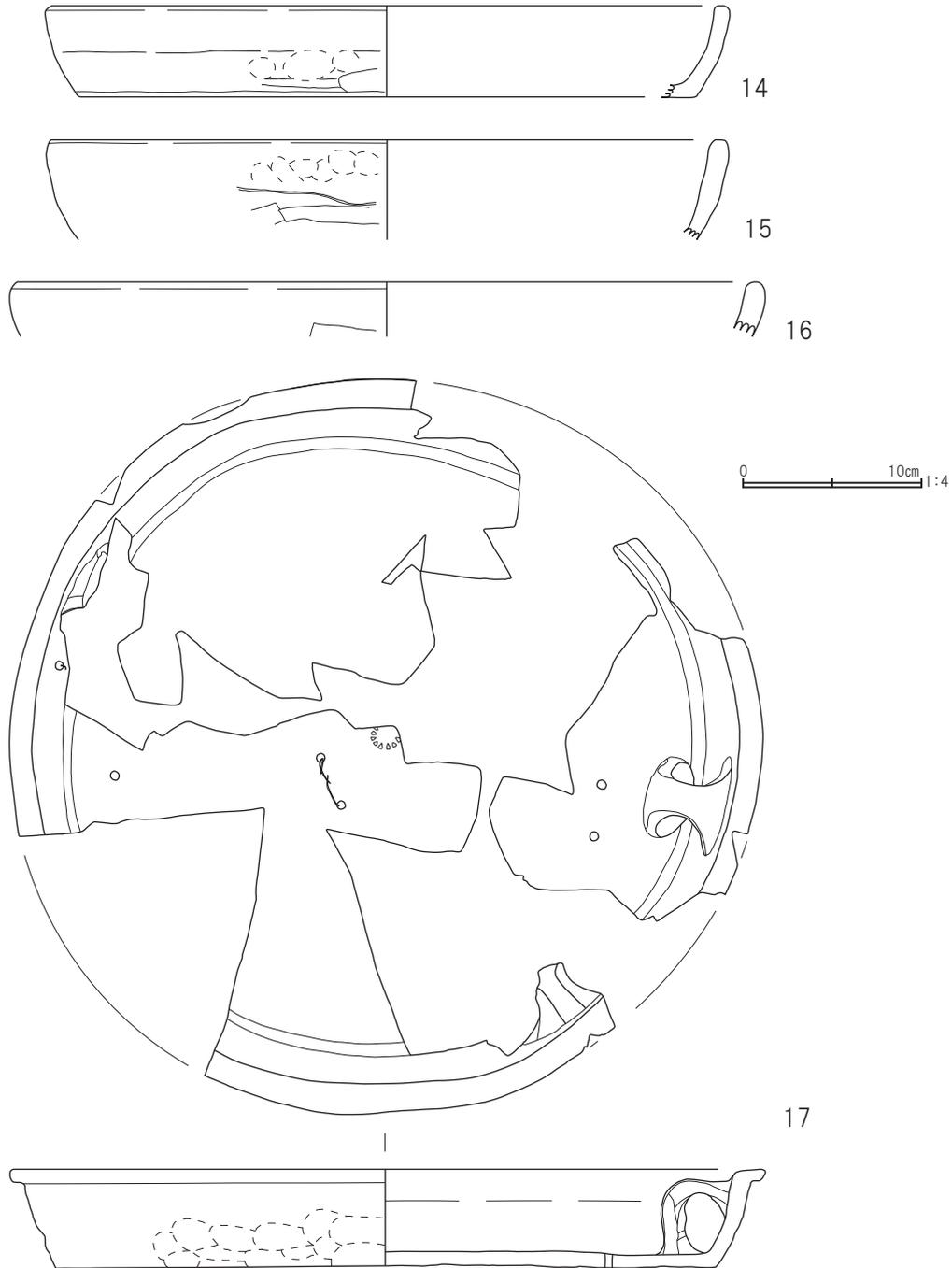
1 溝跡

第1号溝跡 (第7図)

位置 38 - 55 ~ 57 グリッドに位置する。調査区の中央部西寄りを南北に縦断している。



第8图 第1号沟迹出土遗物1



第9図 第1号溝跡出土遺物2

規模 検出長9m、幅3.88～26.5mを測り、走行軸の方位は真北を示す。

断面形 逆台形状を呈し、深度80cmである。土層観察から、規模を縮小して再度機能した可能性が考えられる。

重複 第2号溝跡、第3号溝跡、第4号溝跡、第5号溝跡と重複関係にあり、第4号溝跡より新しい。第2・3・5号溝とは、全てが同時期ではないが、並存し、連結して機能していた可能性がある。

時期 時期を決定付ける遺物がないが、近世に帰属するものと考えられる。

出土遺物 奈良・平安時代から近世にいたる遺物がみられ、いずれも流れ込みまたは埋没過程での廃棄である。1は土師器、2は須恵器であり調査区外北東側に展開する集落からの流れ込みと考えられる。

第2表 第1号溝跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(12.0)	(2.0)	-	BCDI	C	にぶい黄橙色	口縁部片	
2	須恵器甕	-	(6.3)	-	ABN	A	暗緑灰色	頸部片	末野産
3	陶器壺?	-	(4.9)	-	AEN	A	黒褐色	胴部片	内外面に鉄釉
4	青磁坏	-	(3.5)	-		A	オリーブ灰色	胴部片	龍泉窯 鎬連弁文
5	青磁皿?	-	-	-	B	A	緑灰色	口縁部片	
6	陶器挿鉢	-	-	-	ABIN	A	褐灰色	胴部片	内外面に釉薬 炆器質
7	陶器挿鉢	18.0	(9.0)	-	ABCHIN	A	灰褐色	10%	常滑産
8	陶器壺	-	(4.9)	-	ABDI	A	灰オリーブ色	肩部片	外面に灰釉
9	陶器碗	-	(2.8)	3.8	M	A	明オリーブ灰色	50%	染付
10	陶器碗	-	(2.1)	(5.0)	B	A	外面：褐灰色 内面：灰白色	底部片	内外面に鉄釉
14	瓦質土器焙烙	(38.2)	5.2	(34.4)	ABDJKM	B	暗オリーブ灰色	口縁～胴部片	
15	瓦質土器焙烙	(38.2)	(5.6)	-	ABFJKM	B	暗緑灰色	口縁部片	
16	瓦質土器焙烙	(41.4)	(3.0)	-	ABHJKM	B	灰色	口縁部片	
17	瓦質土器焙烙	42.2	5.4	36.9	ABCIJ	B	黄灰色	60%	補修口に銅線残存
No.	機種	高さ	幅	厚み	材質	残存率	備考		
11	砥石	(6.3)	3.1	2.0	凝灰岩	90%	四面使用		
12	茶臼	(17.8)	-	-	安山岩	15%	挽手差込穴あり		
13	空風輪	21.4	13.6	11.0	角閃石安山岩	95%	やや扁平 底面にホゾあり		

3は常滑産陶器壺。4・5は龍泉窯産青磁であり、4の鎬連弁文青磁碗は、12世紀後半に帰属するものである。6～10は近世陶器。6・7は挿鉢で内面に楡目がある。8は壺、9・10は碗形態をとる高台付の底部片。11は凝灰岩製の小振りな砥石で四面が使用されている。12は直径18cm程の安山岩製茶磨の上石である。供給口と挽き手差込口が辛うじて残存している。13は角閃石安山岩製五輪塔の空風輪である。扁平な形状で、頂部が僅かに欠けるが、底部はホゾが残存する。14～17は瓦質土器焙烙である。外面はケズリと指頭による調整がみられる。17は3単位の吊手である。修繕の痕跡があり、補修口に銅線が遺存していた。

第2号溝跡（第10図）

位置 37・38－56・57 グリッドに位置し、調査区の南部を東西に流れる。第一号溝に繋がって途切れ、連結箇所を南側へ広がる。

規模 検出長4.48m、幅1.24mを測り、走行軸の方位はN－87°－Wを示す。

断面形 逆台形状を呈し、深度46.8cmである。土層観察から、埋没し再度機能した可能性が考えられる。

重複 第1号溝跡、第1号土坑と重複関係にあり、第1号土坑より古い。第1号溝跡は、並存し連結して機能していた可能性がある。

時期 時期を決定付ける遺物がないが、近世に帰属するものと考えられる。

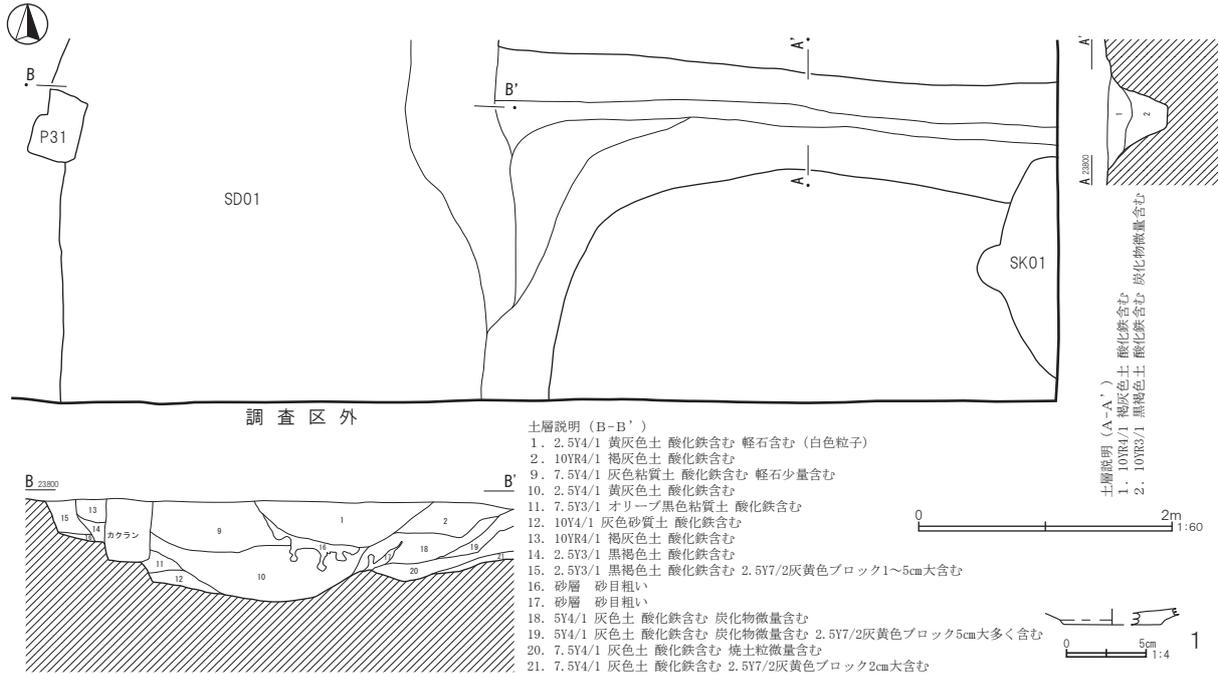
出土遺物 かわらけの底部1点が検出されたが、流れ込みと判断される。

第3号溝跡（第11図）

位置 37・38－56 グリッドに位置する。調査区の中央部を東西に流れ、第一号溝に繋がって途切れる。

規模 検出長5m、幅2.96mを測り、走行軸の方位はN－90°－Wを示す。

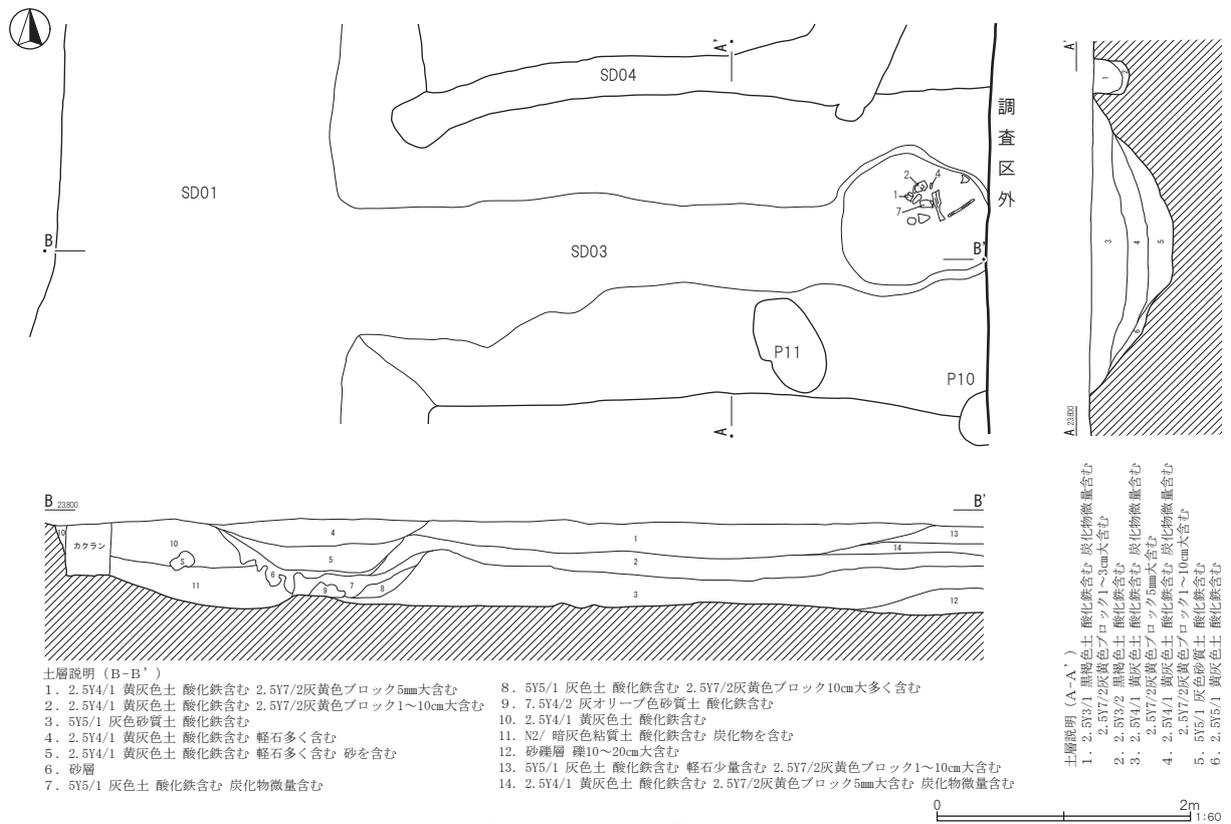
断面形 ゆるやかな逆台形状を呈し、深度64.4cmである。土層観察から、埋没し再度機能した可能性



第10図 第2号溝跡・出土遺物

第3表 第2号溝跡出土遺物観察表

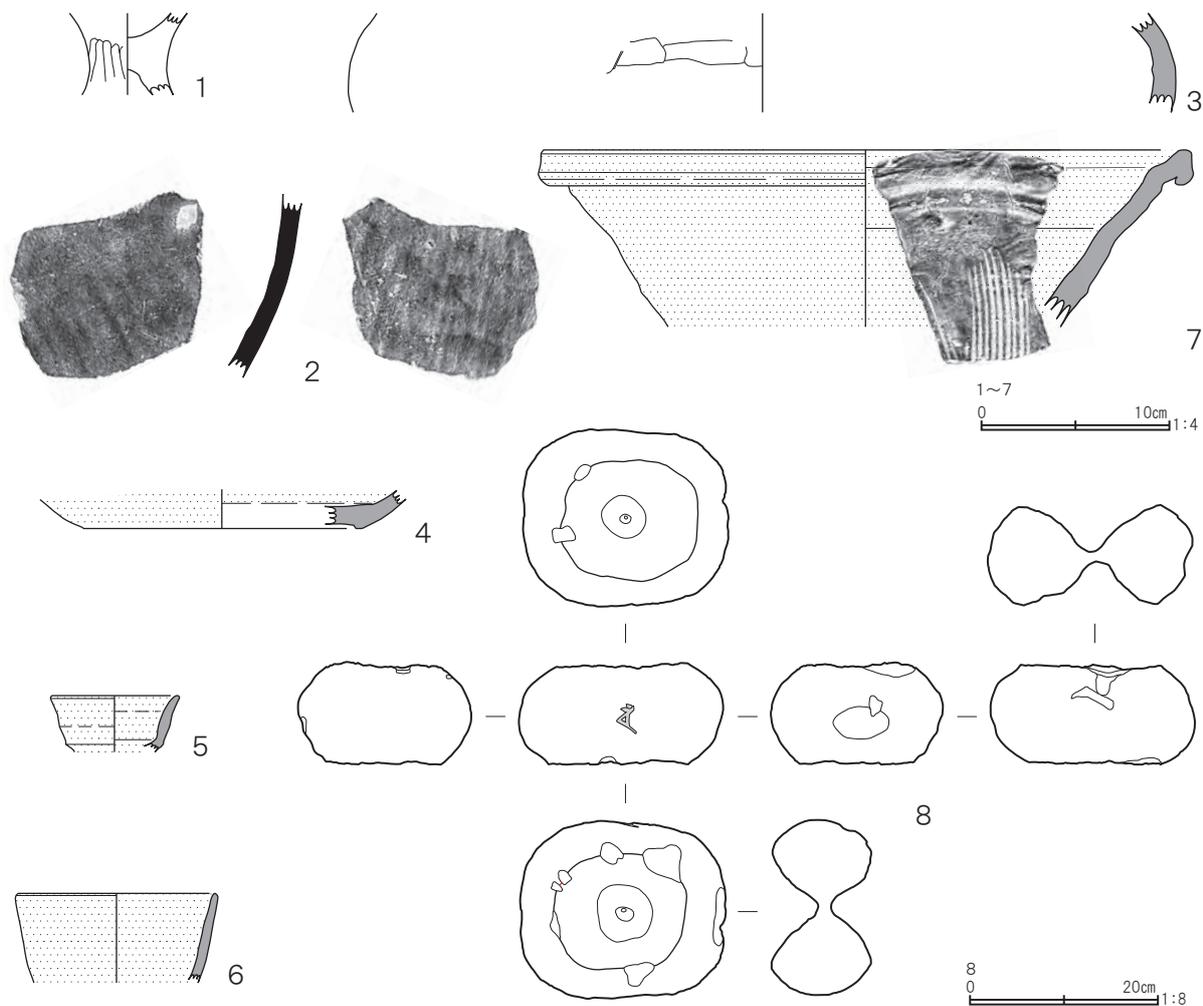
No.	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	かわらけ	-	(1.0)	(6.2)	BI	C	にぶい黄橙色	底部片	磨耗著しい



第11図 第3号溝跡

が考えられる。また東側床面に不整形な円形の窪みがみられ、井戸跡であった可能性を示唆しておく。

重複 第1号溝跡、第4号溝跡、第10~12号ピット、と重複関係にあり、第4号溝跡より新しい。第



第12図 第3号溝跡出土遺物

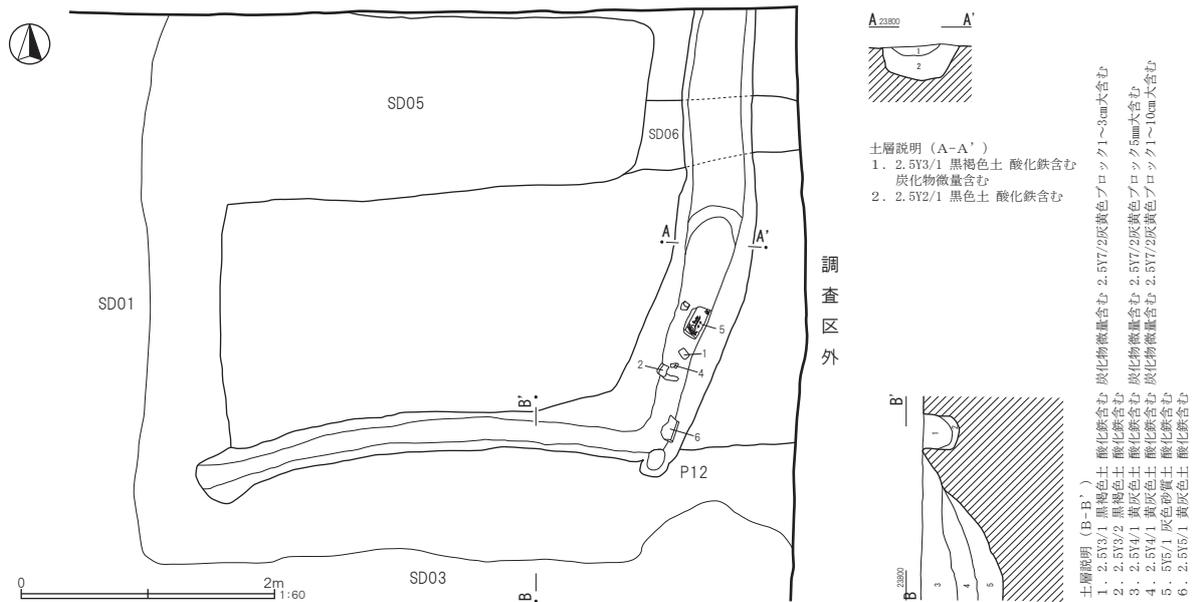
第4表 第3号溝跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器台付甕	4.2	-	-	ABEG	B	にぶい褐色	脚部片	
2	須恵器甕	-	-	-	ABFGMN	A	灰色	胴部片	南比企産
3	陶器甕	-	-	-	ABEIMN	A	外：にぶい褐色 内：灰褐色	肩部片	常滑産、肩部径44.0cm
4	陶器皿	-	-	(14.7)	MN	A	灰白色	底部片	志野産 内外面長石釉
5	陶器猪口	(6.8)	-	-	M	A	灰黄色	20%	志野産 内外面長石釉
6	陶器碗	(10.8)	-	-	B	A	にぶい橙色	口縁～体部片	萩産 内外面に釉薬
7	陶器搗鉢	(34.6)	-	-	MN	A	褐灰色	口縁部片	内外面に鉄釉
No.	機種	高さ	幅	厚み	材質	残存率	備考		
8	水輪	10.5	21.5	19.0	角閃石安山岩	95%	梵字「バン」の陰刻に墨書あり		

10～12号ピットより古い。第1号溝跡は、並存し、連結して機能していた可能性がある。

時期 東側床面より近世陶器を検出している。小破片が多く時期決定が困難であるが、近世に帰属するものと考えられる。

出土遺物 1は土師器高杯の脚部で外面のケズリ調整が明瞭である。2は須恵器甕の胴部。3は常滑産陶器壺の肩部。4・5は志野産陶器で内外面に長石釉が施されている。6は萩産陶器か。7は陶器搗鉢で内外面に鉄釉が施され、内面に櫛目がみられる。8は角閃石安山岩製五輪塔の水輪である。扁平な形状で、正面に「バン」が陰刻され、墨書されている。形状は21.5×18.8×10.2cmの隅丸長方形で通



第13図 第4号溝跡

第5表 第4号溝跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器甕	-	-	-	ABFN	A	灰色	体部破片	
2	瓦質土器捏鉢	-	-	-	ABDHIMN	A	灰白色	口縁部破片	
3	灰釉陶器坏	9.8	2.4	5.3	ABM	A	黄灰色	20%	内面口縁部に灰釉
4	灰釉陶器碗	-	-	(4.8)	ABM	A	灰白色	30%	内外面に釉薬
No.	機種	高さ	幅	厚み	材質	残存率	備考		
5	板碑	(21.5)	(15.5)	2.5	緑泥片岩	30%	脇侍「サク」、蓮座、左杵線、銘文あり		
6	板碑	(20.0)	(11.0)	(1.5)	緑泥片岩	15%	蓮座、左杵線		
7	板碑	(13.0)	(11.5)	(1.7)	緑泥片岩	10%	蓮座?		

常見られる円形の水輪と異なる。天地に円形に窪みがあり、組合わせ用のホゾ穴とみられる。まとめても記述するが、古墳の石室の壁材を転用して加工された可能性がある。

第4号溝跡（第13図）

位置 37・38 - 55・56 グリッドに位置する。調査区の北東部を「L」字に流れ、第5号溝跡上で途切れる。

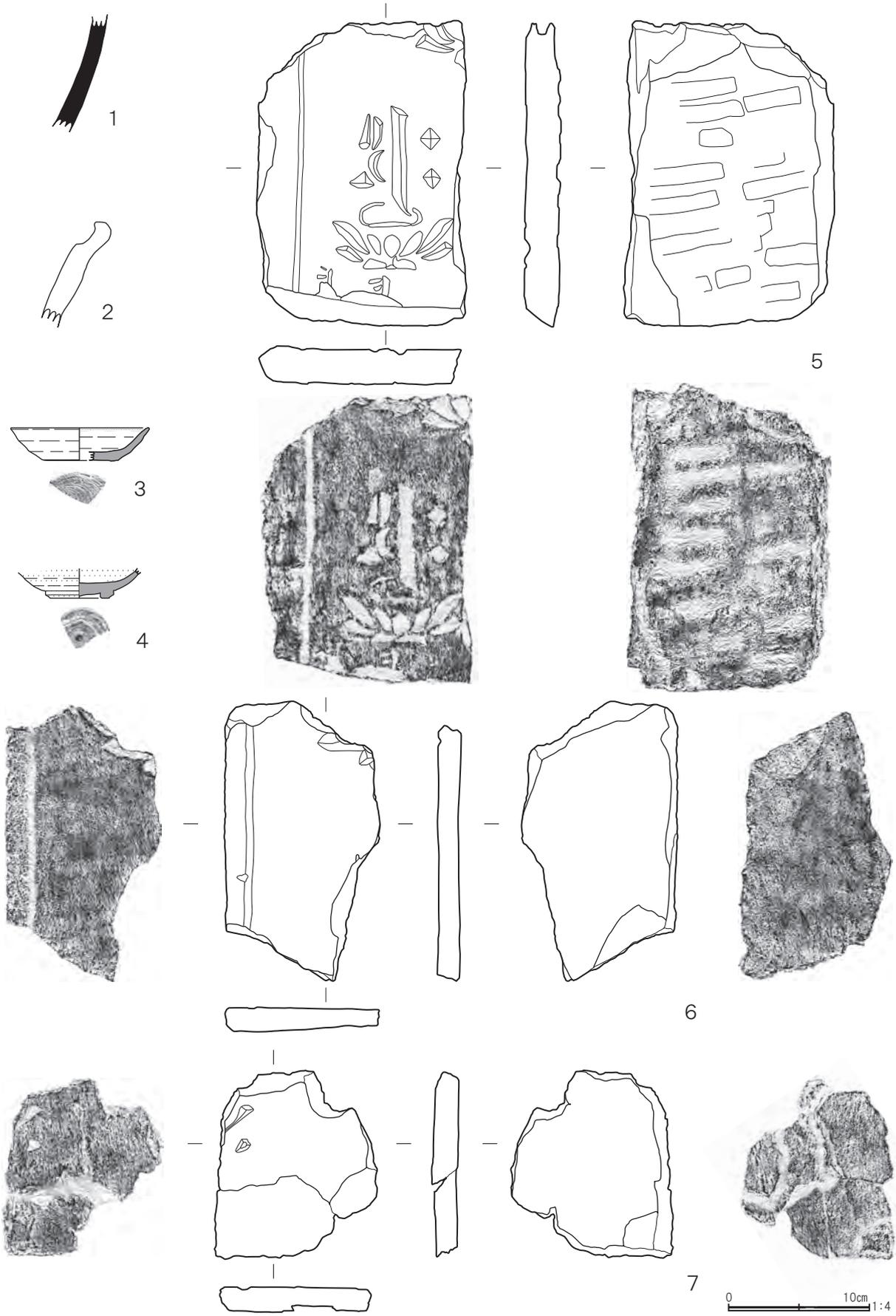
規模 検出延長 7.1 m、幅 0.66 ~ 0.32 mを測り、走行軸の方位は N - 9° - E から N - 85° - E へと折れる。流路も直線的ではなく、緩やかにカーブしている。

断面形 ゆるやかな箱型形状を呈し、床面は船底状である。深度 27 cmである。

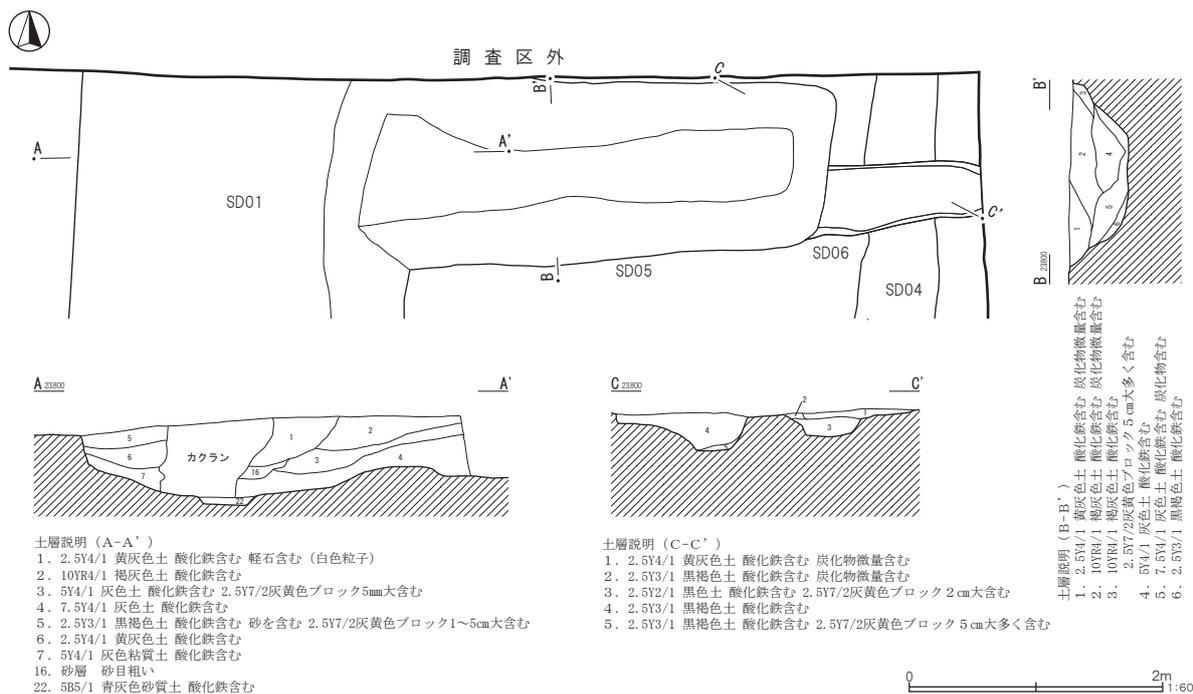
重複 第1号溝跡、第3号溝跡、第6号溝跡、第12号ピットと重複関係にあり、第1号溝跡、第3号溝跡、第6号溝跡、第12号ピットより古い。

時期 出土遺物より、13世紀代に帰属するもの考えられる。

出土遺物 1は須恵器甕の胴部片で流れ込みである。2は在地産瓦質土器捏鉢の口縁部片。3は灰釉陶器小皿で内面口縁部に薄く灰釉がハケ塗りされる。4は灰釉陶器碗で高台付底部片。5は阿弥陀三尊種子板碑である。脇侍「サク」の下に蓮実・蓮弁が配置される。二行の銘文がみられるが、判読は困難である。裏面には横位ノミ跡が残る。6は板碑片で、蓮座の陰刻がみられ、主尊に配置されたものと考えられる。左杵線との位置関係から、一尊種子板碑と思われる。7は風化による剥離が著しい板碑片であ



第 14 图 第 4 号沟迹出土遗物



第15図 第5・6号溝跡

第6表 第5号溝跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	陶器皿?	-	(1.5)	(6.0)	C	A	内: 灰白色 外: 灰白~褐色	底部片	マフ ^ル 状の胎土 内面に長石釉



第16図 第5号溝跡出土遺物

る。辛うじて蓮座の陰刻がみられるが、5・6の蓮弁の表現とは異なるものである。

第5号溝跡 (第15図)

位置 37・38 - 55 グリッドに位置する。調査区の北部を東西へ流れるが、西側は第一号溝跡に連結して途切れ、東側は調査区内で立ち上がる。

規模 検出延長 3.64 m、幅 1.48 m を測り、走行軸の方位は N - 89° - E を示す。流路は直線的である。

断面形 ゆるやかな逆台形状を呈し、深度 46 cm である。

重複 第1号溝跡、第6号溝跡と重複関係にあり、第1号溝跡は、並存し、連結して機能していた可能性がある。第6号溝跡より古いと推定される。

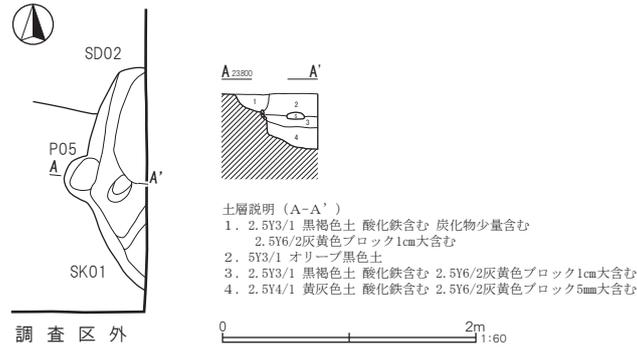
時期 時期を決定付ける遺物がないが、近世に帰属するものと考えられる。

出土遺物 1は陶器皿の底部片で、内面に長石釉が施されている。

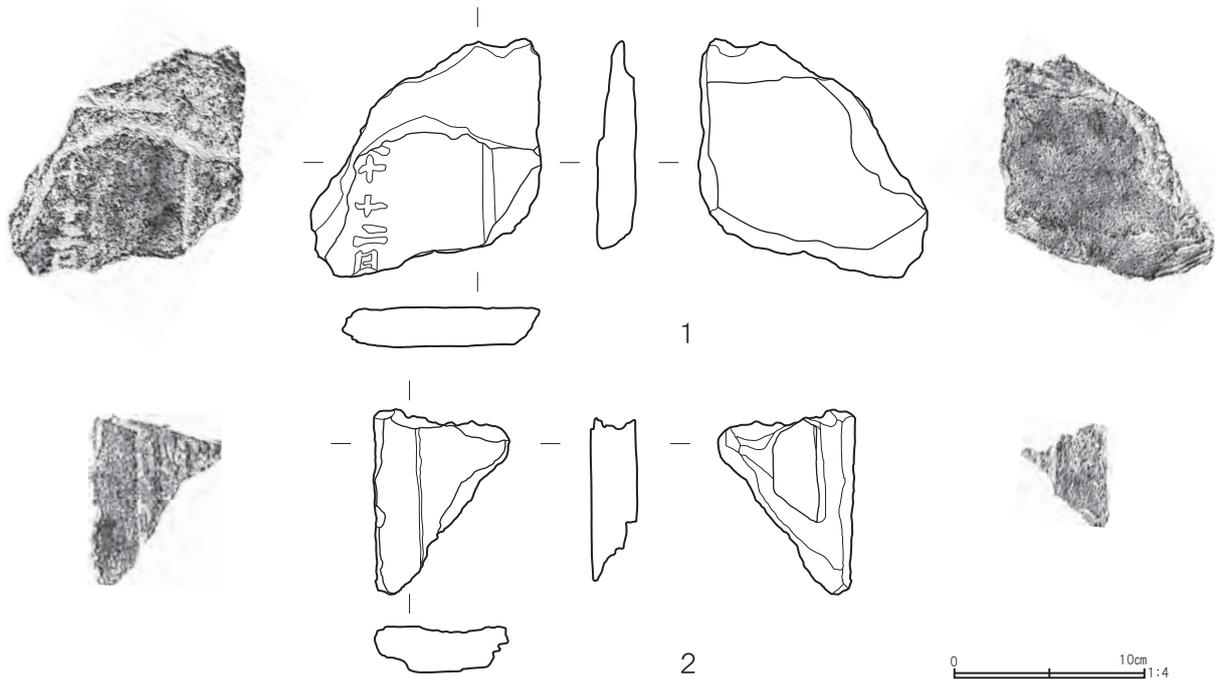
第6号溝跡 (第15図)

位置 37 - 55 グリッドに位置する。調査区の北部を東西へ流れるが、西側は第5号溝跡の上で消滅する。

規模 検出延長 1.26 m、幅 0.40 ~ 0.56 m を測り、走行軸の方位は N - 86° - E を示す。流路は直線的である。



第17図 第1号土坑



第18図 第1号土坑出土遺物

第7表 第1号土坑出土遺物観察表

No.	機種	高さ	幅	厚み	材質	残存率	備考
1	板碑	(10.8)	(11.9)	(2.2)	緑泥片岩	10%	銘文「口十二口」、右枠線
2	板碑	(9.8)	(7.1)	(2.4)	緑泥片岩	5%	枠線

断面形 ゆるやかな逆台形状を呈し、深度6 cmである。

重複 第5号溝跡と重複関係にあり、第5号溝跡より新しいと推定される。

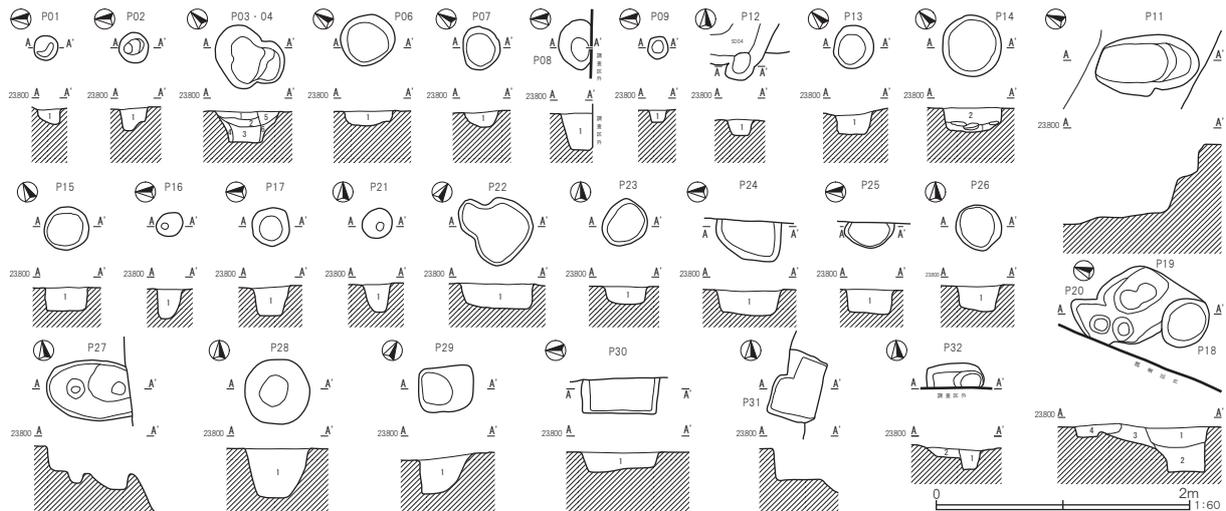
時期 時期は不明である。

出土遺物 なし

2 その他の遺構

第1号土坑 (第17図)

位置 37 - 56・57 グリッドに位置する。調査区の南東部に所在し、遺構の大半は調査区外であり、西

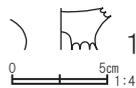


- P01土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック1cm大含む 炭化物少量含む
- P02土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック1cm大含む 炭化物少量含む
- P03-04土層説明 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色土
 2. 10YR2/2 黒褐色土 灰黄色ブロック1cm大多く含む
 3. 2.5Y3/1 黒褐色土 灰黄色ブロック1cm大多く含む
 4. 2.5Y3/1 黄灰色土
 5. 2.5Y3/1 黒褐色土 灰黄色ブロック1cm大少量含む
 6. 2.5Y3/1 黒褐色土 灰黄色ブロック1cm大多く含む
- P06土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大微量含む
- P07土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大微量含む
- P08土層説明 (A-A')
 1. 5Y3/1 オリーブ黒色土 酸化鉄含む
- P09土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 灰黄色ブロック1cm大含む
- P10土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 灰黄色ブロック1cm大含む
- P12土層説明 (A-A')
 1. 5Y5/1 灰土 酸化鉄含む
- P13土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大微量含む 炭化物含む
- P14土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大微量含む 炭化物・焼土粒含む
 2. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大微量含む 炭化物・焼土粒含む
- P15土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大微量含む 炭化物含む
- P16土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック1cm大含む 炭化物微量含む
- P17土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック1cm大含む 炭化物微量含む
- P18・19・20土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大含む 炭化物・焼土粒含む
 2. 5Y3/1 オリーブ黒色土 灰黄色ブロック1cm大多く含む
 3. 2.5Y3/1 黒褐色土 灰黄色ブロック1cm大多く含む
 4. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大含む
- P21土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大微量含む 炭化物微量含む
- P22土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む
- P23土層説明 (A-A')
 1. 10YR3/1 黒褐色土 酸化鉄含む
- P24土層説明 (A-A')
 1. 10YR3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック1cm大含む
- P25土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 炭化物微量含む
- P26土層説明 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック5mm大含む 炭化物微量含む
- P28土層説明 (A-A')
 1. 10YR2/2 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック1cm大含む 炭化物・焼土粒微量含む
- P29土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む 灰黄色ブロック1cm大含む
- P30土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む
- P32土層説明 (A-A')
 1. 2.5Y3/1 黒褐色土 酸化鉄含む
 2. 2.5Y4/2 暗灰黄色土 酸化鉄含む

第19図 第1～4, 6～9, 11～32号ピット

第8表 第21号ピット出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器台付甕	-	(2.2)	-	ABCDIN	A	灰黄褐色	脚部片	磨耗著しい



第20図 第21号ピット出土遺物

側を部分的に検出した。

規模 検出した東西は0.43 m、南北は1.78 mを測る。正確な規模は不明であるが、平面プランは円形を呈すると思われ、復元直径は約2.5 mである。推定であるが、規模や覆土等の状況を考慮すると、井戸跡であった可能性が高い。

断面形 上層はロータ状に開くが下層は不明である。床面も不明であるが、南側に踊り場的な平場が僅かに形成されている。検出した深度は46 cmである。

重複 第2号溝跡と第5号ピットと重複関係にあり、第2号溝跡より新しく、第5号ピットより古い。

時期 第2号溝跡より新しい近世段階のものと思われる。

出土遺物 板碑片を検出した。1は右枠線と「口十二月」と紀年銘が印刻されている。紀年銘について、

第9表 ピット計測表

番号	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
P01	37-57	円形	0.18	0.18	0.11	
P02	37-57	円形	0.24	0.24	0.17	
P03	37-57	楕円形	0.51	(0.37)	0.24	P04 より古い。
P04	37-57	楕円形?	0.34	(0.20)	0.11	P03 より新しい。
P05	37-57	円形	0.36	(0.24)	0.18	
P06	37-56	円形	0.42	0.40	0.11	
P07	37-57	円形	0.34	0.29	0.12	
P08	37-57	楕円形	0.39	0.27	0.29	土層観察で柱痕が確認されている。
P09	37-56・57	円形	0.18	0.17	0.10	上面は不整形だが、底面は整った形状。
P10	37-56	円形	0.43	0.24	0.16	
P11	37-56	楕円形	0.79	0.49	0.60	SD03 と重複し、本ピットが新しい。
P12	37-56	隅丸方形?	(0.22)	0.20	0.13	
P13	38-57	円形	0.34	0.32	0.16	
P14	38・39-56・57	円形	0.48	0.46	0.19	扁平な河原石を礎石としている。
P15	38-56	円形	0.35	0.33	0.19	
P16	38-56	円形	0.22	0.18	0.23	
P17	38-56	円形	0.30	0.28	0.23	
P18	38・39-56	円形	0.39	0.38	0.35	P19 より新しい。
P19	38・39-56	方形?	(0.57)	0.54	0.27	P18・20 より古い。
P20	38・39-56	方形?	(0.38)	0.37	0.23	P19 より新しい。
P21	38-56	円形	0.24	0.24	0.22	
P22	38-56	隅丸方形?	0.57	0.51	0.19	
P23	38-56	楕円形	0.38	0.33	0.14	
P24	38-56	隅丸方形?	0.50	(0.31)	0.19	SD01 と重複し、本ピットが新しい。
P25	38-56	楕円形	0.32	(0.22)	0.19	SD01 と重複し、本ピットが新しい。
P26	38-56	円形	0.37	0.36	0.20	
P27	38-56	楕円形	(0.67)	0.47	0.35	SD01 と重複し、本ピットが新しい。
P28	38-55・56	円形	0.51	0.50	0.39	
P29	38・39-55	方形	0.44	0.37	0.27	
P30	38-57	方形	0.60	(0.28)	0.16	SD01 と重複し、本ピットが新しい。
P31	38-56	方形	0.53	(0.36)	0.25	SD01 と重複し、本ピットが新しい。
P32	38-57	方形	0.45	(0.19)	0.15	

一文字目とした「口」は「口十」の2文字である可能性がある。四文字目とした「月」は「日」である可能性を残すが、「十二日」となると上位の文字はほぼ「月」となり、「日」である可能性は低い。「十二月」であれば、干支または「年」の文字がない年数が上位に配置される可能性があるため、一文字目の状況に合致する。2は左右が不明であるが、枠線がみられる。

ピット (第19図、第9表)

ピットは32基検出し、調査区西側と東南側にまとまって認められた。掘立柱建物跡に係るピットと考えられ、第1号溝跡より西側で集中することから、集落の広がりが西側にあることを示唆しているものと考えられるが、調査範囲では想定される規則性を見出すことができなかった。規模等各ピットの詳細は一覧表にまとめた。

V 調査のまとめ

当該調査地点は上之古墳群と諏訪木遺跡が重複する箇所であった。今回の調査では、古墳の検出は無く、上之古墳群としての成果は、古墳が存在しないエリアと確認された。古墳群範囲の明確化について一歩前進といえる結果である。また、後述する諏訪木遺跡の出土遺物のうち、角閃石安山岩製五輪塔・空風輪及び水輪がみられた。形状がいずれも扁平である特徴をもつ。推定に過ぎないが、すでに破壊された古墳の石室を構成した壁で使用された石材を転用した可能性がある。近接地の発掘調査（未報告）で、加工痕があり同程度の大きさに調整された角閃石安山岩を、中・近世の井戸跡の覆土中より複数検出している。それらには凹凸の加工があり組合わさるが、井戸の構造に起因するものではないため、石室の壁材の可能性があり、本遺跡の五輪塔と同程度の大きさであった。角閃石安山岩は利根川流域から採取されるが、石材入手のための手間を考慮すれば、身近な石材の転用も有り得ると推測する。上之古墳群において墳丘が残存しているのは1号墳だけである。群としての規模は広くないが、複数の古墳の埋没が想定される。しかし、墳丘が残存しない為、様相が明らかではない。墳丘が消滅した原因として、中・近世段階における農地開発が想定される。当該地は湧水の豊かな地であり、寸土を惜しんでの開墾が、小規模な古墳の残存を許さなかったものと推定され、諏訪木遺跡で確認される入り組んだ複数の溝跡が開発された痕跡として検出される。ただし、1号墳は比較的大きめであり、収穫と農地化の労力がつりあわず、破壊を免れたとも考えられる。また、墳丘上に初現は不明だが、八幡宮が存することから、祀られた段階で境内地として開発対象から完全に外れ、現在に至ったと考えられる。

諏訪木遺跡の範囲内からは、しばしば中世の痕跡を示す遺物が検出される。主に溝跡内に廃棄・または流れ込んだものと判断されるが、板碑、五輪塔、青磁、白磁、かわらけ等である。遺構の検出状況は、時代を跨いで錯綜しており、明確に中世の同時期のものを抽出することが困難である。遺物から判断すれば、青磁・白磁等の舶載品の所持や板碑の造立など一定の財力を持つ勢力が所在していたことが想定される。当該地を含む上之地区には、成田氏館跡、龍淵寺、泰蔵院等の成田氏に係る痕跡が数多く残されている。当地は成田氏が忍城を築くまでの根拠地であり、分家した一族を含め、盤据していたと推定される。豊かな湧水を背景とした、生産力が成田氏発展の基盤であったことは間違いない。時期的な栄枯盛衰は見られるものの、成田一族の影響は色濃くみられる。これらの事柄から、中世遺物は成田氏に係るものと考えられるが、推測の域を出ない。資料の集積を俟って検討する必要があるだろう。

成田氏は、天正十八年の小田原征伐の際に後北条氏に属していた為、所領を没収されている。板碑等の廃棄は、領主等の変更に伴い発生したものか。推測は尽きないが、近世以降はピット等の検出や、土層観察から田の床土とみられる薄い酸化鉄の層を確認しており、集落や耕作地としての土地利用がなされていたことは間違いない。

今回の調査では、以上のような状況が確認された。今後は、さらなる成果の集積を待って、遺跡の詳細が明らかになることを期待したい。

※参考文献は紙数の都合上、割愛させていただいた。

写 真 图 版



全景（西から）



第1号溝跡（北から）



第1号溝跡遺物出土状況1（南から）



第1号溝跡遺物出土状況2（南から）



第1号溝跡遺物出土状況3（南から）

図版 2



第2号溝跡 (西から)



第3号溝跡 (西から)



第3号溝跡遺物出土状況 1 (北から)



第3号溝跡遺物出土状況 2 (東から)



第4号溝跡 (東から)



第4号溝跡 遺物出土状況 (西から)



第5号溝跡 (東から)



第6号溝跡 (北から)



第 1 号土坑 (南西から)



西側ピット群 (北から)



第 18・19・20 号ピット (東から)



第 14 号ピット (西から)



第 8 図 1



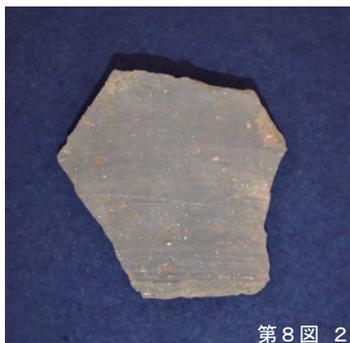
第 8 図 4



第 8 図 5



第 8 図 5



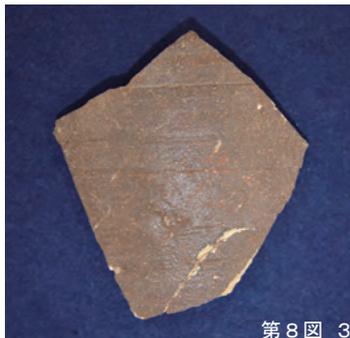
第 8 図 2



第 8 図 6



第 8 図 6



第 8 図 3

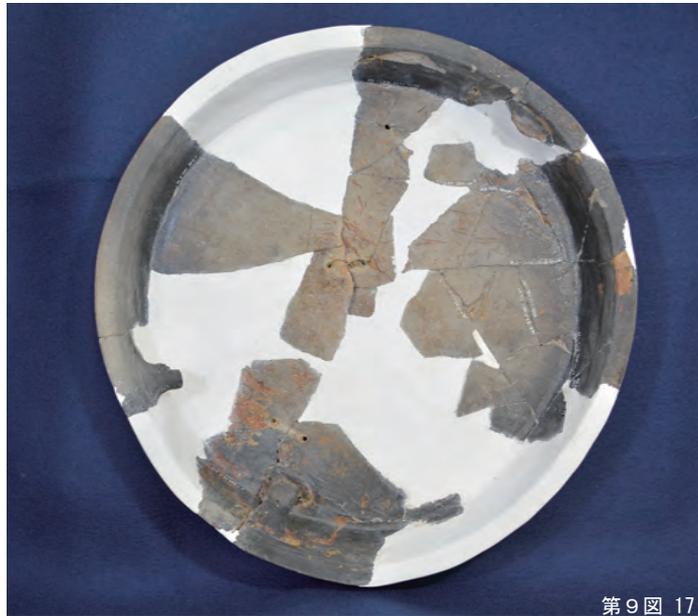
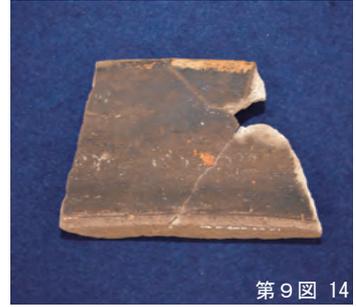
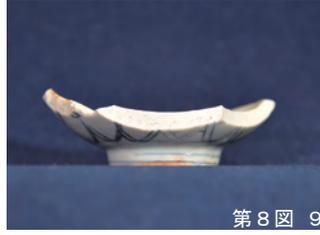


第 8 図 7



第 8 図 7

图版 4





第 12 图 7



第 12 图 7



第 12 图 4



第 12 图 1



第 12 图 2



第 12 图 8



第 12 图 3



第 12 图 8



第 10 图 1



第 12 图 5



第 10 图 1



第 12 图 6



第 12 图 8

图版 6



第 14 图 1



第 14 图 2



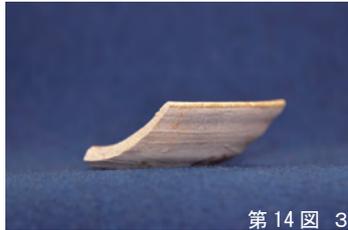
第 14 图 6



第 14 图 5



第 14 图 3



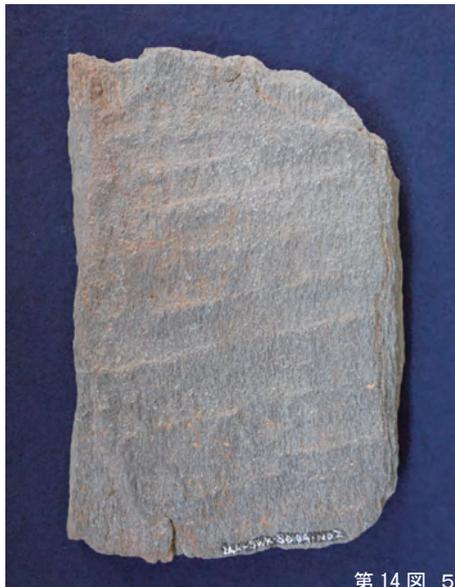
第 14 图 3



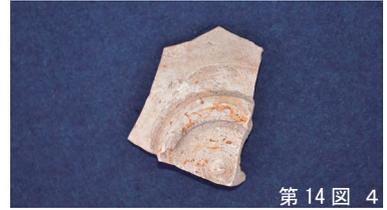
第 14 图 3



第 14 图 7



第 14 图 5



第 14 图 4



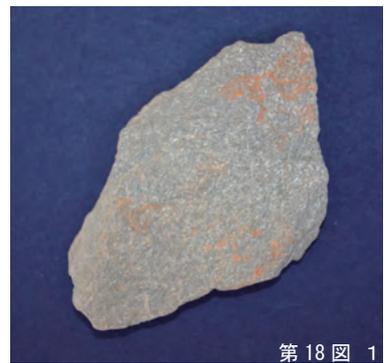
第 14 图 4



第 16 图 1



第 16 图 1



第 18 图 1



第 18 图 2



第 20 图 1

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみのこふんぐん・すわのきいせき							
書名	上之古墳群・諏訪木遺跡							
副書名	熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編集者名	蔵持 俊輔							
編集機関	埼玉県熊谷市遺跡調査会							
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1 TEL048-524-1111							
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(° ' ")	(° ' ")		(㎡)	
かみのこふんぐん 上之古墳群・ すわのきいせき 諏訪木遺跡	くまがやとしけいかくじぎょう 熊谷市都市計画事業 かみのとちくかくせいりじ 上之土地区画整理事 ぎょうがいくかくち 業92街区2画地	11202	059-013 059-016	36° 08' 59"	139° 24' 24"	20120723 ～ 20120817	92.00	共同住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上之古墳群	古墳群	古墳時代						
諏訪木遺跡	集落跡 祭祀 城館跡	縄文時代 ～近世	溝跡・土坑	土師器・須恵器・ 陶磁器・板碑・ 五輪塔		衣川を水源とする用水路が継 続使用されたことを確認した。		

熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財発掘調査報告書

上之古墳群・諏訪木遺跡

平成25年3月31日発行

発行／埼玉県熊谷市遺跡調査会

印刷／朝日印刷工業株式会社